



【曲目解説】

《大澤壽人／チェロとピアノのためのソナタ長調》



戦前は欧米、戦後は日本で活躍した作曲家・指揮者、大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）は、再評価が急激に進んでいる。没後半世紀以上も埋もれていたが、21世紀になる頃になって藤本賢市氏と片山杜秀氏によって再び脚光を浴び、現在は日本洋楽史における注目の存在である。

大澤の音楽活動の全貌は近年ようやく明らかになった。わずか47年の生涯（創作活動は実質23年）に、作曲・編曲合わせて1000作品近くを遺した圧倒的な創作力は、「天才」の名にふさわしい。殊に、ボストン・パリ留学期の作品は今聴いても斬新で、豊かな発想力に

満ち、当時の最先端の手法を取り入れた大胆な作風が際立っている。

大澤は1906年（明治39）8月1日、壽太郎・トミ夫妻のもとに、二男四女の長男として神戸で誕生した。父は技術者で神戸製鋼所に創業時頃から関わり、後には大澤工業所を起こした。母は心根の優しいクリスチャンで、大澤は日曜学校で讃美歌を歌う幼年期を送った。関西学院に入学してからはグリークラブやオーケストラ部で活動する傍ら、学院オルガニストを務めるなど、キリスト教を通して音楽に親しんだ。

1930年、同学院高等商業学部を卒業した大澤は、宣教師の人脈によってアメリカに渡り、9月にボストン大学音楽学部に入学。独学だった作曲法を初步から始めると、直ちに頭角を現し、早くも2年目には作品がアメリカのラジオ局から放送されたほどだった。

1932年9月にはニューイングランド音楽院にも入学して、F・コンヴァースに師事。この頃から才能は大輪の花を咲かせ始め、約半年で300枚以上の楽譜を書き上げるという驚異の成長を見せる。33年6月に日本人として初めてボストン交響楽団（ポップスオーケストラ）を指揮して披露した《小交響曲》や、日本最古のピアノ協奏曲の一つである《ピアノ協奏曲第一番》は、この時期の作品である。



大学卒業後には、クーセヴィツキに献呈した《コントラバス協奏曲》やコンヴァース献呈の《交響曲第一番》など、大作を次々に完成。大澤はボストン音楽界が囁く「和魂のウルトラモダン派」の作曲家に成長を遂げた。そして、世界一流の作曲家になりたいと更なる大志を抱いて、次の留学地に向かったのである。

1934年10月、パリに到着した大澤は《交響曲第二番》を年内に、翌35年に《ピアノ協奏曲第二番》を僅か3ヶ月で完成させた。同時期にエコール・ノルマル音楽院に入学。作品への助言をもらおうと、大家P・デュカと名教師N・ブーランジェに師事した。

1935年11月には、名門コンセール・パドゥー管弦楽団を率いて、作品発表と指揮による大演奏会を開催。サル・ガヴォーには、イペールやフランス六人組のオネゲル、ミヨー等、20世紀前半の西洋音楽史を飾るきら星達が来場。上記二作と歌曲《桜に寄す》は絶賛を博し、演奏会評で「日本からのパリ楽派」に例えられる大成功を収めた。

当時のパリ楽壇は、難を逃れて自国を離れた外国人音楽家達、「パリ楽派」の活躍で華やかさを増していた。また、世界中から音楽の徒が集まり、池内友次郎や平尾貴志郎なども留学中だった。この世界楽壇でいち早く作品発表を行い、パリ楽派に例えられた大澤のデビューは戦前の日本洋楽史における快挙だったのである。

1936年2月、足かけ6年に及ぶ留学から帰国した大澤には、凱旋的な意識があったかもしれない。だが、落差は大きかった。欧米であればどの評価を得た大澤を受け容れるには、時局は余りに暗く、成長半ばの日本楽壇は余りに小さかった。

帰朝演奏会の後は戦局の影響で、演奏会形式での作品発表が段々困難になってゆくが、この事は逆に大澤を新しいジャンルの開拓へと向かわせた。ラジオ、舞台、映画などに才能を注ぎ込み、戦後は詩人・画家・舞踊家・映画監督たちと共に制作の輪を拡げた。輝くキャリアを持った時代の寵児は、創造的な関西文化圏の中心で多忙を極めていた。

しかし、そんな活躍の日々は突然に終わりを告げた。欧米での再活動を考えていた矢先の1953年(昭和28)10月28日、出先で倒れた大澤は搬送先の病院で帰らぬ人となる。大澤自身が驚いたに違いない結末だった。

《チェロとピアノのためのソナタ ト長調》は、26歳の時の作品である。1932年9月にニューイングランド音楽院に入学した大澤は、10月12日に着手、翌11月に完成。創作の速さは周囲を驚かせ、作曲

を習い始めてまだ2年でありながら、煌くばかりの才能を示していた。

初演は1933年1月2日、ボストン日本協会主催による「大澤壽人作品発表会」で行われた。米国芸術院に詰め掛けた聴衆の多くはアメリカ上流階級であり、前駐日大使フォーブスが臨席するという、新聞にも報道される音楽会だった。ボストンで著名な演奏家であるJ・ブラウン(チェロ)とF・ティロットソン(ピアノ)が自ら初演者となったのは、大澤が籍を置く学校で教鞭をとる二人が、大澤の突出した力量を認めたゆえである。

会は熱気に包まれる成功だった。1931年9月に満州事変が勃発して以来、アメリカの対日感情が悪化する中で、華やかな成功は大澤の精神面で明るい光となった。また、この頃から質の高い作品群が溢れ出した事や、世界を目指す大志を書簡に綴り始めた事を合わせると、『チェロソナタ』は創作上のターニングポイントと認められる。

楽曲は「急-緩-緩-急」の4楽章構成で、第3楽章には四分音(しぶんおん)が用いられている。当時、最先端の作曲法だった四分音の使用はボストンでも話題になったほどで、『ピアノ五重奏曲』(1933年)と『コントラバス協奏曲』(1934年)へと統いて、さらに深められた。

また、『チェロソナタ』の楽章構成、「第1楽章：ソナタ形式、中間楽章：3部形式、終楽章：ロンド形式」を大澤は生涯好んだ。この作品の9ヶ月前に『ピアノ三重奏曲』で初めて用いて以来、晩年近くの『トランペット協奏曲』(1950年)にも見られる様に、留学期の成果は後の創作への礎となつたのである。

第1楽章：アレグロ・モデラート

ト長調・ソナタ形式。冒頭に和音が続いた後、シンコペーションを特徴とする軽快なト長調の第1主題がチェロ、ピアノの順で提示される。続くニ長調の第2主題は、ピアノの三連符に乗せて付点のリズムを伴ったチェロが抒情的に歌う。調の配置や展開部における主題の活用など、伝統的なソナタ形式を端正に踏襲する中、日本の楽想が息づく。

第2楽章：アンダンテ 愛情深く印象派風に

ト短調・3部形式 A1-B-A2。A1部分はピアノが前打音を伴いながら日本の民謡音階に基づく旋律を奏で、チェロが続く。中間B部分はニ短調で拍子も転じ、チェロが朗々と歌う。A2部分は倍音を利用したチェロのフュージオネットで印象的に始まる。

第3楽章：レシタティーヴ モデラート

調号がなく実質的には「ト調」。レシタティーヴはオペラの語りの部分を指すが、四分音を含みつつ上行する断片的な旋律と民謡風の旋律の交代によって、ゆるやかに形式が形作られる。チェロの四分音やグリッサンドはもちろんのこと、広いピアノ音域の使用や、「ソシレ」を指向しながら最低音には常に「レ」が響くなど、作曲法を駆使して内面的な「語り」の感情が表現された、凝った楽章である。

第4楽章：アレグロ・モデラート

ト長調・大ロンド形式A-B-A-C-A-B-A。短い序奏に始まり、ロンド主題Aは伸びやかな旋律が25小節に亘るフレーズである。これに対し、Bはスタッカートやピッツイカートでアーティキュレーション上の変化を見せ、中間部Cはハ短調でアンダンティーノへテンポを落とす。個性的な楽想が交替しながら、澁刺と駆け抜ける。

本CDは早くから大澤に注目したミッテンヴァルトが、《ピアノ協奏曲第三番 神風協奏曲》、《ソナチネ》《丁丑春三題 ていちゅうはるさんだい》に次いでリリースする、大澤壽人作品の3枚目である。制作に際しては、神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」より自筆譜複写が提供された。